

# 音楽科教科書にみる保幼小連携および小中連携についての考察

—教育芸術社の現行版教科書を対象として—

## Cooperation between Preschool and Elementary Schools and between Elementary and Junior High Schools in Music Textbooks: Analysis in the Current Edition of Kyouiku-Geijutsu-Sha Co., Ltd.

佐藤 慶治  
Keiji Sato

鹿児島女子短期大学

現在の小中学校音楽科においては教科の枠組みの中で「認定された知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成」が目指される一方、保育園や幼稚園における音楽活動では遊びや生活の枠組みの中で「環境と関わりながら何かを感じる・気づく、考える・試す・工夫すること」が大切にされる。こうした違いがある中で近年、各段階における教育機関が連携し、それぞれ教育の連続性や一貫性を確保することが特に重視されてきている。また、教育の連続性が見直される中において、教科毎における連携の研究や実践も進んできている現状にある。一教科においてこれらの連携を行うにあたっては、各段階における教育者が連携先の教育内容をしっかりと理解することが不可欠であるが、近年、特に小学校の教科書を中心とする形で、各連携へ向けた内容の掲載が多くみられるようになってきている。本論文においては、教育芸術社の現行版教科書を対象として、その分析を行いたい。

**Keywords** : school music education, cooperation between preschool and elementary schools and between elementary and junior high schools, textbook

**キーワード** : 音楽科, 保幼小連携, 小中連携, 教科書

### 1. 研究の方法と概要

本研究においては特に小学校音楽科について、保幼小連携および小中連携に向けた教科書内容の適切な指導法を検討することを目的とし、小学校の音楽科教科書に掲載されている内容と、幼稚園・保育園の音楽活動および中学校の音楽科教科書についての比較分析を行う。

現在の小中学校音楽科においては教科の枠組みの中で、文部科学省に認定された知識・技能の習得や、また思考力・判断力・表現力等の育成が目指される一方、保育園や幼稚園等における音楽活動では遊びや生活の枠組みの中で、環境と関わりながら感じる・気づく・考える・試す・工夫することが大切にされる。これらに基づく小学校音楽科と保育園・幼稚園の音楽活動におけるギャップについては〔佐藤2019〕において、歌唱活動を中心とする形で既に議論を行った。それについて、以下に簡単にまとめたい。

保育園・幼稚園の音楽活動では、指針・要領における「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」という目的（ねらい）の下、子どもたちはある程度、自由に歌を歌っているが、小学校では幼児教育で求められていない能力面を養う活動内容が学習指導要領で示されており、「階名で暗唱」することや「楽曲の気分を感じ取る」こと、また、歌唱自体をみんなと声を合わせてしっかり歌っていくことなどが求められる。このようなギャップや、また小学校入学時点での子どもたちの音楽的スキル・知識の差異や、幼稚園・保育園の音楽活動で扱われる幅広い楽曲（小学校高学年の学習指導要領で示されるような音楽要素を用いた楽曲等も扱われる）と規定に基づく小学校音楽科における楽曲の違い等が存在するため、音楽科での「小1プロブレム」が生じると推察される。

近年の音楽科教科書（〔佐藤2019〕では教育出版の2015年刊行版を扱った）については、そのようなギャップを埋めるため、幼児教育の音楽活動に近い種々の工夫がなされており、また楽曲自体も幼稚園・保育園で扱われるものが多く含まれている。小学校教員がそれを理解した上で、1年生において、可能な限り幼稚園・保育園の音楽活動に近い形式での授業を行うことによって、「小1プロブレム」の解消につながると考えられる。また、幼稚園・保育園の側から積極的に園での音楽活動についての情報を地域の小学校に発信していくことも必要になってくる。

以上が〔佐藤2019〕の内容であるが、本論文においても保幼小連携については基本的に上記と同じスタンスで議論を進

める。それは、以下に示す中央教育審議会より出された保幼小連携についての指針〔中教審2015〕とも関連するところである。

幼児教育と小学校教育の接続に関しては、全ての教科等において幼児教育との接続を意識した教育課程を編成したり、幼児教育の特色を生かした総合的な指導方法を取り入れたりするなど、スタートカリキュラムの編成等を通じて、幼児教育との接続の充実や関係性の整理を図る必要がある。〔中略〕こうした接続を確かなものとするため、接続を担当する教員のみならず、小学校全体の教職員による取組が求められる。

ここにある「スタートカリキュラムの編成等」ということについては、クラス編成であったり教育課題の設定であったり、いくつかの解釈をすることができるが、小学校教育については必ず「教科書」というものが存在し、教育内容も大きくそこに依拠する。そのため、幼児教育と小学校教育の接続に関する研究では教科書の分析が重要になってくると考えられる。

また、小中連携についても同じく中教審によって以下の指針〔中教審2012〕が出されている。

小中一貫教育の実施に当たっては、小学校と中学校の教育課程の系統性を確保していくことが重要であり、そのためには、小・中学校教員が互いの学校の教育課程を理解することが求められる。具体的には、小学校教員は自らが指導する内容が中学校における学習にどのようにつながっていくのかを理解しながら指導し、中学校教員は小学校における学習の程度を把握した上で各分野の指導をすることが必要である。その際、例えば小・中学校教員の合同研修会における意見交換を通じ、学力観、授業観を一貫したものとすることで、系統性の担保につなげていくことが考えられる。

すなわち、小中連携を行うためには、各段階における教員が、それぞれの教育課程を理解することが必要であり、特に小学校教員については、小学校における教育内容が、中学校の学習指導内容にどのようにつながっていくかを理解して指導することが重要ということである。これに関しても、特に小学校高学年を中心とした教科書の比較分析が重要になってくるであろう。

以上より本論文では、音楽科においてこれらの連携を行うにあたって、各段階における教育者が連携先の教育内容をしっかりと理解することが不可欠であるという立場をとる。前述のとおり、近年、特に小学校の教科書を中心とする形で、各連携へ向けた内容の掲載が多くみられるようになっているが、本論文においては、鹿児島県全公立小学校等、九州地域の小中学校音楽科で広く使用されている教育芸術社の現行版（2020年刊行版）教科書を対象として、その分析を行いたい。

## 2. 小学校音楽科教科書低学年にみられる「遊び」と保幼小連携

第1章で述べたように、保育園や幼稚園等における音楽活動では遊びや生活の枠組みの中で「環境と関わりながら何かを感じる・気づくこと、考える・試す・工夫すること」が大切にされる。これは「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という領域「表現」の目的につながっていくことであるが、この目的を達成するためには、「遊び」を通じた総合的な指導がかかせないものである。〔幼稚園教育要領解説2018〕より、幼児期における遊びの大切さを以下に引用したい。

遊びにおいて、幼児が周囲の環境に思うがままに多様な仕方に関わるということは、幼児が周囲の環境に様々な意味を発見し、様々な関わり方を発見するということである。〔中略〕これらの意味や関わり方の発見を、幼児は、思考を巡らし、想像力を発揮して行うだけでなく、自分の体を使って、また、友達と共有したり、協力したりすることによって行っていく。さらに、遊びを通じて友達との関わりが深まってくるにつれて、ときには自分の思いや考えを意識して表現し、相手に伝えたり、互いの考えを出し合ったりするようになっていく。〔中略〕自発的な活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである。したがって、幼稚園における教育は、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である。

ここで語られるように、保育園・幼稚園における幼児の活動は、「遊び」というラベルを付けて実践されることがほとんどである。砂場遊びや運動遊び、ゲーム遊びや製作遊び等の活動を通じて、幼児は種々の能力を身につけ、成長してい

く、音楽活動についても、リズム遊びや楽器遊び、更には「遊び歌」の歌唱等を通じて、基礎となる音楽性が保育園・幼稚園を通じて身につけられていく。

〔佐藤2019〕の分析では、別会社の教科書ではあるが、既に2015年刊行版の小学校音楽科教科書において、保幼小連携を意識した以下のような内容がその前の版の教科書と比較して、変更追加されていることを論じた。

- ・《いぬのおまわりさん》や《かえるのがっしょう》などの幼稚園・保育園でもよく歌われる曲を子どもたちが絵から見つけて、更にはそれを歌ってみる「知っているうたをみつけてみんなでうたおう」
- ・歌唱共通教材の《ひらいたひらいた》を身体表現も伴う「わらべうた」の項目に位置づけ、それと関連付けた形で他のわらべうたも学ぶ形式に変更している「おんがくにあわせて（わらべうた）」
- ・《どれみのうた》の楽曲を使って、「どれみにあわせてからだをうごかさう」という頁が追加されており、階名唱の学習の前に身体表現と合わせたわかりやすい形で音名を覚えられるように変更されている「どれみとなかよし」

これらについては、教育芸術社の2015年刊行版においても類似の内容（単元「うたでなかよしになろう」および「どれみでうたったりふいたりしよう」）が掲載されていることを確認している。ただし、これらの保幼小連携を意識したと思われる内容でも、2015年刊行版においては必ずしも「遊び」というラベル付けがされているわけではなかった。

教育芸術社の音楽科教科書は、基本的に2頁の見開き毎に1曲か2曲の楽曲をテーマとし、また楽曲名とは別のタイトルが付けられ（例：2015年刊行版1年生12, 13頁の《さんぽ》：「おんがくにあわせてからだをうごかしましよう」）、更に説明書きも別に記載されている。これらの中に「遊び」という単語がみられる楽曲は、2011-20年の3版毎に以下のとおりである（見開きの左頁番号を記載）。

- ・2011年刊行版：1年8曲（6, 10, 22, 26, 30, 36, 46, 50頁）、2年6曲（4, 6, 10, 14, 20, 28頁）
- ・2015年刊行版：1年7曲（8, 12, 18, 34, 52, 54, 56頁）、2年8曲（6, 8, 10, 14, 18, 24, 50, 52頁）
- ・2020年刊行版：1年10曲（6, 8, 10, 16, 18, 30, 40, 44, 62, 64頁）、2年11曲（8, 12, 14, 16, 18, 20, 22, 24, 26, 58, 60頁）

これをみると、明らかに2020年度刊行版（現行版）は、第1学年における「遊び」を重視している、すなわち保育園・幼稚園からの連続的な学びの在り方を教科書に内包させていると言えるだろう。現行版におけるその具体的な内容を、以下に例としていくつか示したい。

（1年生8, 9頁）アメリカの遊び歌である《セブン・ステップス》を使用し、1年生の初回の授業で友達とダンス遊びを行う活動。2015年刊行版には存在しない内容であり、新しく追加された部分である。（図1）

（1年生10, 11頁）歌唱共通教材である《ひらいたひらいた》を使用し、わらべうた遊びを行う活動。《セブン・ステップス》やこのわらべうた遊びのような単元を活用して、クラスの中に「共に音楽を楽しむ雰囲気づくり」を行っていくことが重要と言える。（図2）

（1年生16, 17頁）「たんたんたんうん」という4拍子のリズムに合わせて、名前や好きな果物を言う遊びの活動。リズム活動の基礎的なものであり、子どもによっては保育園・幼稚園でより難しいリズム活動にも取り組んでいたことが考えられるため、教師の声かけ等の工夫で「遊び」の活動として盛り上げていくことが大事だと考える。（図3）

（1年生30, 31頁）「おとをさがしてあそぼう」というテーマで、保育園・幼稚園でも行われることのある音探し遊びを行う活動。また、見つけた音を使って声遊びに発展していく。2015年刊行版には存在しない内容であり、現行版より追加された。「遊び」を通じて、その後の「おんがくづくり」や「鑑賞」の基礎を養う活動と言えるだろう。（図4）

（1年生44, 45頁）新項目の「せんりつでよびかけあおう」の中の遊びの活動（《やまびこごっこ》自体は2015年刊行版にも掲載されている）。「遊び」を通じて、「歌唱」の基礎を養う活動と言えるだろう。（図5）

（2年生18, 19頁）保育園・幼稚園でもよく使用される楽曲《ミッキーマウスマーチ》と《メヌエット》をテーマとし、拍子の聞き分けを行う活動である。「音楽にあわせて手あそびをしたり体をうごかしたりしましょう」という指示がある。2015年刊行版には存在しない内容であり、新しく追加された。子どもの在籍していた園によって違う手遊びを習っている可能性があるため、この場における手遊びを、教師が改めて示す必要があるだろう。（図6）

以上、本章において、現行版の音楽科教科書では保幼小連携につながる形で「遊び」がクローズアップされていることを検討した。小学校音楽科1年生においては特にこの点に鑑み、手遊びやわらべうた遊び等を授業の中に適切に取り入れ、

進学したばかりの1年生児童が保育園・幼稚園とギャップを感じないような授業作りを行っていくことが必要である。



図1 1年生8, 9頁



図2 1年生10, 11頁

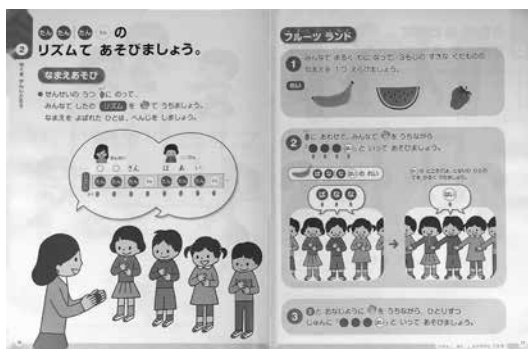


図3 1年生16, 17頁



図4 1年生30, 31頁



図5 1年生44, 45頁



図6 2年生18, 19頁

### 3. 小学校音楽教科書6年生にみられる「生活や社会の中の音や音楽」と小中連携

第2章では保幼小連携について論じたが、本章では小中連携を扱う。そもそも2020年刊行版の小学校教科書については、平成29年3月に改訂された新学習指導要領の内容を受けて編纂されたものである。小学校では2020年から、中学校については2021年からの完全実施となっている。

この版の学習指導要領においては「何ができるようになるか」ということがテーマとなっており、音楽科においては小中学校ともに以下の三つの課題（これまでもやっているが、更に充実させたいこと）が提示されている〔文部科学省2017〕。

- ①感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと

- ②我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと
- ③生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくこと

特に3番目は学習指導要領全体における育成すべき資質・能力の三つの柱のうちの「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」と大きく関わる部分であるため、小中学校の双方で「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化への理解を深める学習の充実を図る」という同じ目標が掲げられた。

音楽科教科書においても、一つ前の版と比較し、現行版ではそこに基づく内容が新しく加えられているが、特に小学6年生教科書と中学教科書（2021年刊行版）で顕著である。これは「生活や社会の中の音や音楽」という新しいテーマについて、小学校最高学年である6年生から中学生にかけて連続した学習を進められるようにするための配慮と考えられる。以下にその内容を引用掲載したい。

小学6年生の47頁では「音楽が人と人をつなぐ」というテーマで、阪神淡路大震災がきっかけになって生まれた《しあわせ運べるように》を事例とし、人と人をつなぐ音楽の力を子どもたちに考えさせる内容が新しく掲載されている。また、46頁には《ふるさと》について、家族や地域の人にインタビューしてみましょうという内容が掲載されているが、《ふるさと》も東日本大震災等で人と人をつなぐ役割を担った楽曲であり、関連した見開き内容と言える。（図7）同じく6年生の特集として、「音の働きや役割について考えよう」というテーマが組まれている。ここではブラインドサッカーが例とされ、社会における音の役割を考えさせる内容となっている。（図8）

そして中学校音楽科では「生活や社会の中の音楽」として特集が組まれている。1年生では仕事歌やサウンドロゴ等の「音や音楽の果たす役割」、2、3年生上ではワークショップ等の「音楽体験を拓くアウトリーチ」といった事例が紹介されている。どちらの学年においても「郷土に伝わる」民謡・祭り・芸能、「アジア・世界の諸民族の音楽」、「生活や社会の中の音楽」という順で掲載されており、日本人を含めた諸民族の生活の中に根付く音楽文化や、社会における音楽の役割ということについて、体系付けて考えることができる。（図9）また2、3年生下でも「生活や社会の中の音楽」が2頁にわたって組まれており、こちらでは音楽に関する仕事が複数、紹介されている。（図10）

更に、音楽科の三つの課題のうち、「② 我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと」についても小学6年生から中学生にかけての大きなテーマとなっており、6年生および中学1年生の教科書については、どちらも最初の見開き頁が日本の伝統芸能（歌舞伎および狂言）の特集となっている。それぞれ「時代をこえて受けつぐ」「伝統をつなぐ」という類義の見出しが記載されており、児童生徒に伝統文化の価値や意義を考えさせる内容になっている。（図11、12）これについて、6年生では《越天楽》の歌や「世界の国々の音楽」の学習単元、中学1年生では上述の「郷土に伝わる民謡」や「アジアの諸民族の音楽」の学習単元が存在しており、そこに結びつく内容と言えるだろう。

以上が本章で取り上げる、現行版の音楽科教科書における小中連携に関する内容であるが、「生活や社会の中の音と音楽」については特に6年生から中学生にかけての連続した学びを重視し、音楽科での学習を通じた「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」につなげていくことが重要と言える。

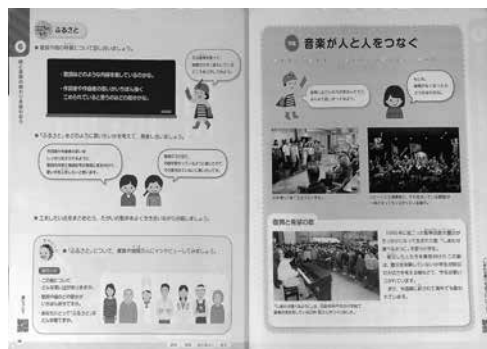


図7 小学6年生46, 47頁



図8 小学6年生46, 47頁



図9 中学1年生66頁, 2, 3年生上72頁



図10 中学2, 3年生下68, 69頁



図11 6年生2, 3頁



図12 中学1年生2, 3頁

#### 4. まとめ

本稿においては、特に小学校音楽科の現行版教科書について、保幼小連携および小中連携に向けた教科書内容の分析を行った。第2章では保育において重視される「遊び」というキーワードを基に、前の版の小学校教科書と現行版を比較した結果、現行版では保幼小連携につながる形で「遊び」が更にクローズアップされていることが導き出せた。小学校音楽科1年生においては特にこの点に鑑み、手遊びやわらべうた遊び等を授業の中に適切に取り入れ、進学したばかりの1年生児童がギャップを感じないような授業作りを行っていくことが必要であると考えられる。また可能であれば保育者は、小学校1年生の教科書におけるこのような内容を把握しておき、「わらべうた遊び」や「言葉を使ったりズム遊び」、「音探し遊び」など、類似の音楽活動を進学前の幼児たちに実践させておくことで、スムーズな保幼小連携に貢献することができるだろう。

また、第3章では6年生の教科書と中学校音楽科の教科書を比較し、小中連携についての考察を行った。現行版の学習指導要領より、小中学校の双方で「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化への理解を深める学習の充実を図る」という同じ目標が掲げられているが、教科書においてもそこに基づく内容が複数みられる。そのため、「生活や社会の中の音と音楽」については特に6年生から中学生にかけての連続した学びを重視し、中学校教員が小学校音楽科で行われた内容を意識して発展的な学びを目指して、更には「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」につなげていくことが必要と考えられる。

以上、本稿では保幼小連携および小中連携という二つの側面から音楽教科書の検討を行った。今回は紙幅の都合もあって部分的な分析に終わっているが、今後、掲載楽曲やそれぞれの頁に書かれている活動の解説等についても分析を行い、より深い連携への研究としていきたい。

#### 引用・参考文献

- 中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」2012年7月13日の抜粋  
中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会「論点整理」2015年8月26日の抜粋

文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽」（2017）

文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽」（2017）

文部科学省「幼稚園教育要領解説（2）遊びを通しての総合的な指導」（2018）p. 30-31.

佐藤慶治「保幼小連携に向けての歌唱指導法に関する考察—レパトリーの観点から—」『精華女子短期大学研究紀要（45）』（2019）pp.53-57.

『小学校の音楽 1 年生』（教育芸術社, 2020）

『小学校の音楽 6 年生』（教育芸術社, 2020）

『中学校の音楽 1 年生』（教育芸術社, 2021）

『中学校の音楽 2・3 年生上』（教育芸術社, 2021）

『中学校の音楽 2・3 年生下』（教育芸術社, 2021）

（2022年11月24日 受領／2022年12月8日 受理）